



2016年1月13日放送

頻用処方解説 人参養栄湯

福岡大学病院 東洋医学診療部 久保田 正樹

人参養栄湯の原典

エキス剤として採用されている人参養栄湯の原典は『和剂局方』（1107-1110：中国で発行された医薬品の処方集）です。同書には「積勞虚損、四肢沈滞、骨肉酸疼（辛い痛み）、呼吸少氣（呼吸が浅い状態）、行動喘噎（ぜんてつ：あえぎすすり泣く）、少腹拘急、腹背強痛、心虚驚悸、咽乾唇燥、飲食無味、陰陽衰弱、悲憂惨戚（悲しみ憂う）、多臥小起（臥床がちな状態）、久しきものは積年、急なるものは百日、漸にして瘦削に至る。五臓の気竭き、喝き、振復すべきこと難きを治す。また肺と大腸ともに虚し、咳嗽下痢、喘乏少氣、嘔吐痰涎を治す。」とあります。

解説すると、体力が衰え、四肢が重だるく、骨肉が辛く痛み、呼吸が浅くなり、行動がままならず、あえぎすすり泣き、下腹部が引きつり、腰背部が痛み、心が虚して動悸があり、咽が渇いて唇が乾燥する、飲食に味がなく、陰陽が共に衰弱し、気分が憂鬱になり、臥床がちになり、長年に渡り、急性のものでも百日で体がやせ細る。（中略）肺と大腸が共に虚して、咳嗽、下痢、喘鳴して呼吸が浅くなり、嘔吐や痰が出るものを治す、という意味になります。

浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤薬室方函口訣』には、「此の方は気血両虚を主とすれども、十補湯に比すれば遠志、橘皮、五味子ありて、脾肺を維持する力優なり。『三因』には肺与大腸俱虚を目的にて下利喘乏に用ひてあり。万病とも此の意味のある処に用ゆべし。また傷寒壞病に、先輩、炙甘草湯と此の方を使ひ分けてあり。熟考すべし。また虚勞、熱有りて咳し下利する者に用ゆ。」とあります。

十補湯とは十全大補湯のことで、比べると遠志、橘皮、五味子があるので脾や肺をよくする力がまさる。『三因』という本には、肺及び大腸が共に虚しているの、下痢やあえい

で息切れしているものに使用している。どんな病気でも、この意味で使用しなさいということです。

炙甘草湯との使い分け

炙甘草湯は心の気血共に虚して結滞、動悸が起こるものを治し、咳や痰が多く出る肺痿（熱をもった肺炎や結核など）にも用います。身体に熱があり津液が失われているため、炙甘草湯にはそれを補う人参や麦門冬、地黄、阿膠が含まれます。構成生薬は補気、補血に有効なものが多く、人参養栄湯の生薬の効能に似ています。人参養栄湯の症状には下痢が記載され、構成生薬には緩下剤が含まれません。炙甘草湯には麻子仁が含まれることが異なります。

近代における使用目標

矢数道明の『新版漢方後世要方解説』には、「津田玄仙の『療治経験筆記』には人参養栄湯を諸病に用ゆる目的は第一に毛髪脱落、第二に顔色無沢、第三に忽々喜忘、第四に口は淡不食、第五に心悸不眠、第六に周身固渋、第七に爪枯筋涸というなり。」とあります。

「毛髪脱落」や「爪枯筋涸」（爪が枯れて筋の潤いが無くなる状態）は血虚の所見であり、「顔色無沢」は顔色光沢が無くなり蒼白になる状態で、血流が悪い状態と考えられ、血虚や心虚（心気不足）でも起こります。「忽々喜忘」（心がうつろで物忘れする状態）や「心悸不眠」（動悸がして眠れないこと）も心気虚または気逆の所見です。「口は淡不食」とは、食欲がなく食べられないことで、気虚や脾虚の所見となる「周身固渋」は身体から色々なもの（汗、咳、下痢）が漏れ出る状態であり、表は虚して肺や大腸に異常があることを示しています。まとめると気血両虚があり、その原因として脾や肺や大腸に異常があるものには、人参養栄湯が有効であると理解できます。

現代の使い方

脾が虚することで気虚や栄養不足から血虚になることが考えられますが、三枝勉は胃がんで幽門側切除術後、5年経過後に頭痛、爪がかけやすい、動悸、冷汗を呈した69歳女性に対して人参養栄湯エキスを処方し、2ヵ月で動悸、頭痛、爪の改善、体重増加を認めた例を報告しており、心気虚、血虚、脾虚に対して有効だったことを示しています。

脾の働きとして、気の生成に関与する作用のほかに、血液を滑らかにして血液を血管から漏れ出ないようにする作用があるとされています。これは現代医療の考えでは血小板の機能にあたると思われます。宮崎保らは、骨髄異形成症候群（MDS）の血小板減少を伴う例において、人参養栄湯によって血小板減少の改善効果があったと報告しています。

五行理論においては五臓における肺の異常は鼻に開竅するとされますが、内田淳らは、副腎皮質点鼻療法に抵抗した嗅覚障害をもつ97人に対して、当帰芍薬散または人参養栄湯を3ヵ月間内服してもらい、治療の前後で基準嗅力検査を行い、治療効果を評価しています。結果は当帰芍薬散治療群31例中その43%に治癒または軽快、人参養栄湯治療群66例中その26%に治癒または軽快を認めました。

著者は人參養榮湯を構成する生薬の遠志にはアセチルコリン合成酵素であるコリンアセチルトランスフェラーゼを活性化する作用があり、マウスでは嗅球レベルでの神経細胞の成長が促進されるとの報告から、副腎皮質ホルモン点鼻療法に抵抗する症例では漢方治療を検討することも必要であると考えています。

嗅覚の異常が記憶に関係する場合もあります。鳥居塚和生らのマウスの実験では、5%硫酸亜鉛により嗅覚阻害を行うと、記憶学習能試験において記憶獲得能、記憶保持能力が低下しますが、当帰芍薬散、人參養榮湯を投与した群で記憶能力の改善があったと報告しています。

記憶障害のある人に対して人參養榮湯を使用した報告では、工藤千秋らは、軽症から中等度のアルツハイマー病患者（AD）に対して、ドネペジルと人參養榮湯エキスの併用治療群 12 例と、ドネペジル単独治療群 11 例を 24 ヶ月間にわたって評価しています。人參養榮湯併用群はドネペジル単独群に比べて ADAS-J cog のスコアが低く、24 ヶ月間の認知機能が保たれていました（ADAS-J cog では点数が高いほど認知機能が悪いことを意味する）。記憶、見当識、計算力、構成力などを評価するミニメンタルステート検査（MMSE）では両群間に有意差を認めなかったが、行動心理状態を評価する NPI 検査の抑うつスコアでは人參養榮湯併用群で有意な改善を認めており、以上の結果から、軽度抑うつのある AD 患者に対し、人參養榮湯とドネペジル併用群は、ドネペジル単独治療群に比べてより良い治療だとしています。

著者らは、AD 患者の脳のミエリン形成不全と脱髄の改善に人參養榮湯が有効であるとしており、その活性本態は陳皮のヘスペリジンやナリルチンであるとしています。

構成生薬の薬能

人參養榮湯の構成生薬は、当帰・芍薬・地黄・白朮・茯苓・人參・甘草・桂枝（桂皮）・陳皮・遠志・黄耆・五味子の 12 味です。当帰、芍薬、地黄は補血、鎮痛、強壯作用があり、補血剤の四物湯（当帰、芍薬、地黄、川芎）から川芎を去ったものです。白朮・茯苓・甘草は四君子湯の構成生薬であり、脾虚を改善し補気に働きます。黄耆は強壯、補気、止汗、利尿作用があり、補気作用を強めて、人參と合わせて参耆剤と言われます。桂枝（桂皮）は発汗、解熱、芳香性健胃の作用があり、甘草と組み合わせて気逆にも効果があります。

ウンシュウミカンの果皮の陳皮は芳香性健胃剤、去痰、鎮咳薬としての効果があります。イトヒメハギの根の遠志は、去痰、鎮静、強壯、健忘に対する効果があります。『本草綱目』には、イトヒメハギを「この草を服すれば、能く智を増し、志を強くする。それで遠志と名づけた」という記述があります。人參養榮湯が記憶障害に使用される理由の一つです。チョウセンゴミシの成熟果実の五味子は、鎮咳、収斂、止瀉、滋養、強壯作用があります。陳皮と遠志と五味子には、呼吸器症状を改善させる鎮咳去痰の効果があることとなります。人參養榮湯を構成生薬から考えると、気血両虚で咳や痰などの呼吸器症状を改善させる薬方といえます。

現代において使用される疾患

現在では、呼吸器症状を伴う慢性呼吸器疾患（COPD、結核、慢性肺炎等）、また肺がんなどに使用されることが多いと思われます。しかし、がん治療においては肺以外にも人参養栄湯はよく使用されています。

海堀昌樹らは、ソラフェニブ投与中の進行肝細胞がん患者 12 例に対し、副作用軽減目的に人参養栄湯を 12 週間併用投与して、開始前、4 週、8 週、12 週で評価を行い、倦怠感や食欲不振の改善、肝機能改善、血小板数の増加を報告しています。

田中哲二は、進行期婦人科がん（子宮がん、卵巣がん、膣がん、がん性腹膜炎等）に対して外来で TC 療法（パクリタキセル＋カルボプラチン）単独治療群 26 例と TC 療法＋人参養栄湯併用群 33 例を比較しており、人参養栄湯併用群は非併用群に比べて完全奏効率、奏効率が高いことを報告しています。これら以外にも、抗がん剤治療と併用され、副作用の軽減や治療効果の改善を認めるなどの報告があります。

以上、人参養栄湯の原典、構成生薬、近代における使用目標や現代において利用される疾患についてお話し致しました。